

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月14日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652028

研究課題名（和文）18世紀英文学における「紅茶」と「女性」の表象

研究課題名（英文）Representation of “Tea” and “Women” in the Eighteenth-Century English Literature

研究代表者

大野 雅子（ONO MASAKO）

帝京大学・外国語学部・教授

研究者番号：80233229

研究成果の概要（和文）：17世紀後半に東インド会社によってイギリスに持ち込まれた紅茶や陶磁器などの茶道具は、富裕層にとっては自らが上品でポライトな階級に属していることを示すための重要な物質文化を形成した。紅茶や茶道具に熱狂する女性は17世紀から18世紀にかけての文学作品に数多く登場し、皮肉や揶揄の対象となる。さらに、女性の物欲の激しさは性欲の激しさと同一化される。聖書に始まる女性蔑視の伝統は紅茶と陶磁器という新たなメタファーを得ると同時に、「脆き器」としての女性はその激しい欲望を携えて消費文化の中を跋扈する存在となるのである。

研究成果の概要（英文）：Expensive tea and luxury tea equipage, brought to England by the East Indian Company first in the late seventeenth century, became the passion for the rich who tried to mark their polite status by a set of material attributes. Literary texts, however, present women as more likely to be seduced by such luxury. The male imagination associates the female appetite for things with that for sex. Through the misogynic discourse “tea” becomes a fit metaphor for the female voracity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1000,000	0	1000,000
2011年度	1000,000	300,000	1300,000
総計	2900,000	300,000	3200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：英文学・18世紀・紅茶・女性・贅沢・消費社会・物質文化・階級

1. 研究開始当初の背景

(1) 17世紀後半にイギリスに初めて輸入された紅茶は初めは王侯貴族だけが飲むことのできる特権的な飲み物であったが、18世紀に入ると富裕層を中心に急速に広まっていた。紅茶は高価であるがゆえに上品な飲み物だと思われていた。紅茶を家庭で嗜むという行為は儀式となり、洗練された文化となった。18世紀イギリスにおいて着実に経済力を

増大させつつあった商人たちには、紅茶という物質文化を通して上流階級の仲間入りを果たそうという野心もあった。しかし、階級を上昇するための手段となる「物」はなぜ紅茶であってコーヒーまたはその他の飲み物ではなかったのだろうか。なぜ紅茶は階級と密接な関係を結ぶようになったのだろうか。紅茶はなぜ当時のイギリス社会において「上品」・「洗練」・「礼儀」というような意味を担

うようになったのだろうか。このような疑問に答えるための研究はまだ十分にはなされていない。

(2) 女性蔑視の伝統は聖書に始まる。女性が「脆き器」にたとえられたのはパウロの書においてである。パウロの言葉は、女性は「脆い」がゆえに壊れやすい、だから大切にしなければならないという助言であるとともに、女性は「脆い」がゆえに誘惑に負けやすく、罪を犯しがちであるという警告でもあった。罪深い欲望をその本質として見出された女性は、性欲が強いがためにすぐ誘惑に負けてしまうイヴの末裔であるとされた。さらに、18世紀に消費文化が勃興すると、紅茶や茶道具という高価なものを我先に手にしようとしたのは女性であった。女性の欲望は今や男に向かうだけではなく、高級な物にも向かうとされたのである。

(3) 「消費文化」と「女性」の関係に関しては、ヴェブレン『有閑階級の理論』（ちくま文芸文庫、1998年）がある。女性はなぜ物にこだわり、高級な物を所有していることをひけらかしたがるのか、ヴェブレンは「顕示的消費」と「代行的消費」という用語を使って説明する。すなわち、富裕であるという事実だけでは十分ではない。趣味の良さを示すことのできる洗練された物にその富を費やさなければならない。そして人に見てもらわなければならない。しかし、忙しい夫は消費活動のための十分な時間がとれないため、妻や使用人が代わりに代行的に消費するのである。そのため、女性は階級を上昇させるという家族の期待を背負って消費活動を行うのである。

2. 研究の目的

(1) 紅茶はなぜ女性の飲み物とされたのか。紅茶には女性的な本質が存在しているのか。それとも紅茶が女性としてジェンダー化されたのは歴史的偶然なのか。そうだとしたらどのような歴史的偶然が存在したのか、もうひとつの新しいカフェイン入りホットドリンクであるコーヒーとの違いはどこにあったのか。以上のような疑問を解決することを第1の目的とする。

(2) 第2の目的は、紅茶が女性的な飲み物としてジェンダー化されたプロセスを考察することによって、紅茶を飲むという行為に付与された意味を考察することである。18世紀英国において女性たちが紅茶を飲むという行為は「上品」・「礼儀」・「洗練」というイメージで語られたが、そのような言葉の背後には皮肉が見て取れる。暇を持て余した女性たちがおしゃべりにうつつを抜かし、高価な

紅茶を消費したことに対する男性の軽蔑と苛立ちが様々な文学作品や散文などに表れている。

(3) 女性が紅茶や茶道具という高価なものを好んだというのは歴史的事実なのか、もし歴史的事実に反するとしたら、なぜそのような神話が構築されたのかを分析することが第3の目的である。当時の財産目録などを調査した結果によると、女性の茶道具所有率が男性よりも高いわけではない。男性もやはり東洋から来た贅沢品を所有したいと熱望していたようだ。歴史的事実に反して女性と物欲が結びつけられたのは、女性は欲望が激しいという大前提が存在していたからではないかと考える。

3. 研究の方法

(1) 17世紀後半から18世紀における紅茶をテーマにした医学書、詩、散文、劇、小説などの一次資料を研究した。これらの文献は出版されているもの、British LibraryやHuntington Libraryにmanuscriptの状態では保存されているもの、microfilmで保存されているもの、またはEarly English Books Onlineなどのインターネットサイトから入手可能なものもある。

(2) 18世紀イギリスの女性の生活に関して書かれたフェミニズム批評を中心とする二次資料を研究した。Lawrence Stoneが*The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*において、18世紀に家庭が女性の場となり男性的な場としての「公共の場」から切り離されたと論じたことはその後の批評に多大な影響を与えた。その後、「女性性」の誕生の時代としての18世紀に多くの批評家が焦点を当てている。

(3) 消費文化、物質文化、階級社会についての二次資料を研究した。N. McKendrick, J. Brewer, and J. H. Plumbによる*The Birth of a Consumer Society*は様々な観点から18世紀に消費社会が誕生した様子を分析する。この本が出版されて以来、18世紀を消費社会の誕生の時として見る研究が次々となされている。消費社会や物質文化が18世紀に誕生したことがその後の歴史にどのような影響を与えたのか、階級との関連に着目して研究した。

4. 研究成果

(1) 17世紀後半以降イギリスでは経済力の増大を背景にして、女性が「専業主婦」として家庭で家族のためだけに身を捧げることが可能になった。仕事が「男性の領域」であり、「家庭」が「女性の領域」であるという

「別々の領域」という考え方が出現するようになったのである。それとともに、紅茶よりも少し前にイギリスに入ってきたコーヒーが、17世紀の政治的動乱もあいまって、コーヒーハウスにおいて男たちが議論をしながら飲む飲み物になる一方で、紅茶は二項対立的思考法から家庭で女性が飲む飲み物になったのではないかと考えた。

(2) 18世紀の英国において、紅茶や茶道具は高価であったがゆえに高級な文化の表象としての機能を果たした。そのため、女性たちはそれらを「顕示的に消費」した。女性は男性のように土地を買ったり受け継いだりできない。また、自分で収入を得ることができないために、消費文化に対する欲望は男性とは一層切実なレベルで展開される。女性が物に対する強い執着を見せるのは、消費文化が女性の上昇志向を満足させる数少ない場のひとつであったからではないかと分析した。

(3) 女性は消費活動に大きな情熱を傾けると思われていたが、すべての階級の女性たちが同じようにそうなのではなく、中流または商人階級に所属する女性たちに特にその傾向が見られるという事実を発見した。その理由はイギリス社会特有の流動性にあると考えた。17世紀後半以降ジェントルマン階級以上の財産を蓄えるようになった富裕な商人は土地と家紋を買い、地主階級の仲間入りをすることも可能であった。しかし、教養は買うことはできない。その代わりに消費活動における趣味の良さを示すことを彼らは試みたのではないだろうか。その時代に上品だとみなされていた物は紅茶と茶道具であった。紅茶を嗜み、茶道具を収集するという洗練された趣味を通じて彼らは上流階級の仲間入りを目指したのだと考察した。

(4) 上記において、女性が消費文化に参加することによって階級を上昇しようとする試みについて考察したが、それは必ずしも賞賛の対象ではなかった。紅茶をテーマにした詩作品においては紅茶を飲む女性は賞賛の対象であったが、そこには皮肉なニュアンスが隠されていると考えた。また、劇作品においてはあからさまな女性蔑視が存在する。特に、17世紀後半、王政復古期の劇においては、激しい性欲と物欲をもった女性が笑いと揶揄の対象として登場する。たとえば Wycherley の *Country Wife* (1675年) においては、女性たちが“china closet”という陶磁器を飾るための小部屋に入って夫に知られずに浮気をするという場面がある。女性における物欲と性欲の同一化を表す場面として解釈した。

(5) Duncan Campbell の “A Poem upon Tea” (1735年) という詩においては、紅茶を飲みながら会話に花を咲かせる上品な女性たち、その声が生み出すハーモニーに酔いしれる給仕の少年、そして、恋を成就させる一組のカップルが登場する。詩人は紅茶と女性を賞賛することによって何を伝えようとしているのだろうか。書かれた状況や作者に関する情報が知られていないこの詩は、背後に隠されているかもしれない意図を想像することがきわめて困難である。ひとつの解釈は、ティーテーブルに集うことが上流階級の一員として必要な礼儀や社交性を養う訓練となるというメッセージ性が存在するということである。しかし同時にその背後に潜む詩人の鋭い皮肉を見逃すことはできない。詩全体がおおげさで芝居がかった雰囲気をもつのは、隠された女性蔑視のゆえであろう。ティーテーブルでただらとおしゃべりにうつつを抜き上品ぶって高価な茶葉や茶器を買いたがる女性に対する痛烈な批判がこの詩には存在すると解釈した。

(6) Alexander Pope の *The Rape of the Lock* (1714年) の “The Cave of Spleen” という場面では、動くティーポット・土鍋・瓶などが登場する。女性がティーポットに変身するイメージは同時代の他のいくつかの詩においても扱われている。Robert Burton の *The Anatomy of Melancholy* (1621年) においては、自分の体が物になってしまうという幻想はメランコリーの人間特有のものとして説明されている。しかし、特に女性がティーポットに変身するのはなぜなのか疑問に思った。当時のメランコリーとは感情過多の状態全般を示すものであったことを考えると、性欲や物欲の強さもその症状のひとつの現れであったと思われる。ということは、ティーポットに変身する女性というのは否定的なイメージだったことになる。物欲の対象である茶道具そのものに姿を変えてしまうというのは、欲望の主体と客体が一致するという皮肉であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

大野 雅子、他、中央大学出版部、伝統と変革 - 一七世紀英国の詩泉をさぐる、2010、639、593 - 639

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 雅子 (ONO MASAKO)
帝京大学・外国語学部・教授
研究者番号：80233229

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし